

「弥三郎成綱」が語るもの

——仮名本『曾我物語』に見る頼朝の近臣——

小井土 守敏

一

『曾我物語』は、曾我兄弟の仇討ちを記すとともに、平治の乱の後伊豆國へ配流となつた、源頼朝の流人時代をも扱う作品として知られている。真名本・真名本訓読本、仮名本のすべての系統において、その質・量の差こそあれ、流人頼朝に関する記事が載る。

頼朝の監視役にあたつていた伊東祐親は、自分の娘が頼朝との間に子を儲けていたことを知つて激怒し、頼朝のもとから娘を取り返し、若君を殺害、さらに頼朝の暗殺をも企てる。父の奸計を知つた伊東九郎は、頼朝に内報、伊東からの脱出を進言する。その詞の中に、

藤九郎盛長、弥三郎成綱をば、君御座のやうにして、しばらくこれにおかれ候べし。君は、大鹿毛にめされて、鬼武ばかりめし具し、北条へ御しのび候へ。
(仮名本・卷二「頼朝伊東をいで給ふ事」)

とある。「藤九郎盛長」「弥三郎成綱」ともに、作品中ここが初めての登場個所である。この二人が残つていれば、頼朝もそこにいると思われるだろうというのであり、この伊東九郎の詞は、「藤九郎盛長」「弥三郎成綱」の二人が、流人時代の頼朝の主だった側近であることを示している。「藤九郎盛長」は、安達盛長、弘安八年の霜月騒動で失脚するまで鎌倉幕府の重臣であつた安達氏の礎を築いた人物である。もう一人の「弥三郎成綱」に

ついては、日本古典文学大系『曾我物語』頭注が、「佐々木三郎か」、つまり「盛綱」の誤りかという見解を示している。

ところで、真名本では、二人の近臣は次のように紹介される。

佐殿、盛長・盛綱、朝夕不離御身侍有二人。
(真名本・卷二) 仮名本で「成綱」とされる人物は、真名本では「盛綱」となつていのである(真名本訓読本についても同様)。先述の日本古典文学大系頭注は、真名本に照らした結果、当然導き出される見解であろう。

真名本をもう少し先へ読み進めて、治承四年八月十七日の頼朝挙兵の記事には、以下のように記されている。

差遣藤九郎盛長、佐々木太郎定綱、同次郎盛綱、同三郎成綱、同四郎高綱、加藤次郎景門等、兼隆井伴類郎從等悉誅戮。
(同・卷三) やはり「盛綱」は佐々木盛綱であつて、一見整合性を有しているかに見える(佐々木四兄弟は、正しくは定綱、経高、盛綱、高綱であるが)。

しかし、『平家物語』で知られるとおり、盛綱を含む佐々木四兄弟は、頼朝が山木判官を討つために挙兵する時点で加勢——しかも遅参——する者たちである。延慶本『平家物語』では、佐々木四兄弟の参向に先立ち、兄弟の父秀義が、頼朝への使者を選ぶ際に、

三郎(盛綱)ハ勘当ノ者也。二郎(経高)ハ未佐殿ノ見知給ワズ。太郎(定綱)行。
(第二末 括弧内稱者注)

と語っており、頼朝への使者として最適であるのは太郎定綱であるとしている。ならば、挙兵を遙かに遡る、頼朝の伊東脱出の時点において、三郎盛綱を「朝夕御身を離れざる侍」とするのは、やはり矛盾が残ることになる。真名本『曾我物語』は、佐々木四兄弟の参向の経緯を載せないで、物語進行上の整合性だけは保たれているに過ぎないのである。

いては、舞の本「夢合せ」も挙げられる。以上の作品で、頼朝の二人の近臣の内の一人、藤九郎盛長については共通しているのだが、もう一人の人名については、多くの注釈書が指摘するように、それぞれに異同が生じている。前掲表の記事区分に従って、諸作品におけるこの人名を一覧すると、次表のようになる。

		A	B	B'	C
延慶本	源平	—	野三刑 部成綱	盛綱	盛綱
盛衰記	源平	—	野三刑 部盛綱	盛綱	盛綱
閻諍録	舞の本	定綱	佐々木 定綱	定綱	定綱
夢合せ	真名本	—	—	—	景義
真名本	真名本	盛綱	盛綱	—	盛綱
訓詁本	真名本	盛綱	盛綱	—	盛綱
仮名本	—	—	弥三郎 成綱	—	成綱

*Bの『源平閻諍録』は独自記事を含み、その中で数度当該人物が記されるが、全て「定綱」とする。
*B'は、頼朝脱出後、祐親の襲撃に備えていた者たちが北条へ入る場面。『曾我物語』真名本・真名本訓詁本は「盛長以下」とする。

『源平閻諍録』においては、当該場面に、頼朝と藤九郎盛長、佐々木定綱の三者による問答が独自に設定されている。例えば、頼朝が祐親三女のもとへ通うことを二人に相談する場面では、世の情勢からそれを制止しようとする盛長と、頼朝が東国重代の主である源氏の正統であるから断られるはずもないと主張する定綱と、といった人物造型がなされ、盛長・定綱を対照しようとする意図が見える。いわば文官のような盛長の対極として、武勇に長じた佐々木四兄弟の年長者、武官としての定綱が配されたわけ

けだが、前節でも触れたように、頼朝の挙兵に遅参する定綱が、この時点で既に「御身を離れ」ずに頼朝に仕えているという不自然さは否めない。舞の本「夢合せ」では、Cの部分のみ記事が重なるのであるが、夢想の中で盃を据える人物は、「君の御寵愛に思し召す大場の平太景義」と記される。大庭景義は、諸作品を通じ、藤九郎盛長の夢想に対して夢解きを行う人物である。本稿で問題にしている人物は、作品に登場することはない。舞の本でここに景義を記するのは、登場人物を削減して話を簡素化する効果もあるうが、奇しくもその本文が示しているように、夢の中で盃を据える役は、「君の御寵愛に思し召す」人物——享受者にも共通認識として存在する、頼朝の寵を受ける人物——であることが重要なのであり、適格者であれば、誰でもよかったのである。

『源平閻諍録』や舞の本「夢合せ」においては、盛長とともに頼朝に仕えた人物は、盛長との対比や、その役割に相応しい人物といった、史実とは別の選択基準によって、入れ替えられた人物だと考えられる。

先述の通り、流人時代の頼朝に仕えた二人の侍のうち、安達藤九郎盛長の子孫は、幕府草創期から北条得宗家の時代に至るまで重臣として栄えた。もう一人の侍が、横山党小野姓成綱であるとすれば、その子盛綱の時に承久の乱で京方に従い、鎌倉幕府と敵対する。盛長が安達家の祖として人々の記憶に深く刻まれる頃、盛長とともに若き頼朝に仕えた小野成綱の子は、頼朝が作り上げた体制と対峙する側に位置し、亡ぼされているのである。その結果として、成綱の存在は自然に——あるいは意図的に——人々の記憶から消え去り、成綱の位置は、入れ替え可能なものとなっていたのである。

「入れ替え」という積極的な改作——著作性本文形成——を考えずとも、消極的な異文発生——書写性本文変化——の条件も、二、三挙げられる。

まず「成」と「盛」という字形の類似。また、成綱息が「盛綱」であるということ。そして最も大きく影響したと思われる条件に、佐々木三郎盛綱の存在がある。遅参ではあつたが頼朝の華兵時から従っているわけで、頼朝の古くからの家臣と称しても何ら差し支えがないのである。

延慶本『平家物語』には、こうした書写性本文変化が生じていく過程がそのまま表れていると考えられる。Bの部分で「野三刑部成綱」と記しているにもかかわらず、同一人物をして以降は「盛綱」と記す。この「盛綱」は、成綱息盛綱との混同も考えられるが、おそらくは佐々木盛綱との混同の方が強いであろう。異文發生の始点は、誤写の類だったのだから、その結果生じた人名が、たまたまある程度の信憑性を有していた。少なくとも、書写者や享受者の間に、小野成綱の誤りであると気付くよりも、容易に想起される人物——頼朝の家臣佐々木盛綱という共通認識——があつたわけで、『源平盛衰記』は、その共通認識の上に立つて「盛綱」に統一したのである。

三

頼朝の、伊豆国流人時代の一連の物語を、福田晃氏は「頼朝伊豆流離説話」と称し、伊豆山において生成管理された早い段階の説話が、「古読み本系平家」に採り込まれ、そこから延慶本『平家物語』や『源平盛衰記』、『源平闘諍録』に見られる本文が生じ、一方伊豆山の管理下で伊豆山称揚の態度が付加され、漸次成長した「頼朝流離物語」が、真名本『曾我物語』に採り入れられたとする。即ち、源流を同じくしながらも、真名本『曾我物語』と『平家物語』は、直接の関係はないとする。

今、些細な例ではあるが、氏の見解を、問題の人名にあてはめて考えてみたい。延慶本『平家物語』においては、「成綱」「盛綱」を混用し、また

佐々木四兄弟遅参の記事に関連して、若干の不整合性を含んでいる。延慶本は早い段階で取り込まれた説話の形を継承したために、混乱のもとともなったが、一部史実に即した跡が残っているのである。それに對し真名本『曾我物語』においては、既に「成綱」の位置は入れ替え可能であり、誤写の類からの出発であつたとしても、「成綱」は「盛綱」に入れ替わつた。佐々木兄弟遅参に触れない真名本は、物語内での不整合を生じることなく、「盛綱」は、佐々木盛綱であつて支障はないことになつた。一連の話が、真名本『曾我物語』に取り込まれるまでに、伊豆山称揚の態度の付加以外にも、話の細部が整えられ、物語として漸次成長した痕跡と言える。これは氏の見解にも合致するのである。真名本の訓読・抄出である真名本訓読本も、当然、物語の中では矛盾はない。

では、仮名本『曾我物語』の「弥三郎成綱」は、何に拠つたものなのか。これはやはり延慶本『平家物語』——但し、延慶本の本文中で異同を生じているわけで、仮名本『曾我物語』が延慶本における混用を修正したか、混用が生じる以前の延慶本の本文に従つたかのいずれか——である。同じ『曾我物語』でありながら、仮名本に見られる流人頼朝の近臣の人名は、物語として成長を遂げた真名本ではなく、『平家物語』寄りの来歴を有しているのである。

仮名本『曾我物語』が、単純に真名本や真名本訓読本の下位に位置するものではないことや、基本的な物語進行においては真名本と重なりながら、細部の字句表現において、読み本系『平家物語』に依拠する部分が多いことは、既に指摘されていることである。稿者もかつてこの問題について検討を加え、仮名本『曾我物語』の詞章は、延慶本と長門本との両『平家物語』の間に求められる例が多いが、いずれかの本文が依拠資料であると言えるような決定的根拠は見出だしたがたく、両本の共通祖本のようなも

のを想定せざるを得なかつた。¹³今回検討した人名についても、仮名本『曾我物語』と延慶本『平家物語』との間に類似点を見出だせる——長門本『平家物語』は該当記事を持たないので比較するすべもないが——ものの、延慶本『平家物語』を仮名本『曾我物語』の依拠資料とするに足る証拠がない。本稿における検討も、旧稿の傍証の一つとして教えることができそうである。

仮名本『曾我物語』は、配流中の頼朝に関する記事を、真名本『曾我物語』には拠っていない。それは、仮名本において、頼朝と政子の縁を結んだ伊豆山権現に対して、何ら注意を払っていないことからわかる。仮名本『曾我物語』は、この記事を、延慶本の如き読み本系『平家物語』に取材して記していったのであり、この「弥三郎成綱」は、延慶本に一箇所だけ残されている。「野三刑部成綱」と源を同じくする人名の変容の跡なのである。「野三刑部」から「弥三郎」への変化は、いかにも仮名本らしい無知によるものであつて、あるいは「藤九郎」との均衡を意図した改変であつたとするならば、それはもはや微笑ましくさえある。「成綱」という人名に対しても、彰考館本が勘物とも言うべき傍書——結果的には誤りであつたが——を施した以外、他本は特に疑問も抱かずに書き写していったに違いない。先に「知識に乏しかつたがゆえの偶然の正解」と述べたのは、こうしたことによるのである。

【注】

- 1 稿者の口頭発表「真名本訓読本系統『曾我物語』本文考—新資料紹介—三系列分類の試み—」(軍記・語り物研究会第三三九回例会、平成二二・九・三〇、於法政大学)において、これまでの「大石寺本」という呼称を「真名本訓読本」、及びその伝本グループ名を、「真名本訓読本系統」と称することを提言した。
- 2 引用は、日本古典文学大系『曾我物語』(岩波書店、昭和四一年)による。

- 3 注2前掲書、一〇九頁頭注二三。
- 4 引用は、角川源義氏編、貴重古典籍叢刊3『妙本寺本曾我物語』(角川書店、昭和四四)による。
- 5 引用は、北原保雄氏・小川栄一氏編『延慶本平家物語 本文編 上下』(勉誠出版、平成一一(再版))による。
- 6 本稿における調査伝本は以下の通り。
真名本系統 ○妙本寺本(翻刻・注4前掲書) ○本門寺本(内閣文庫蔵本)
真名本訓読本系統 ○日本大学蔵本 ○静嘉堂文庫蔵本 ○國學院大学蔵武田祐吉氏旧蔵本 ○実践女子大学蔵山岸文庫本 ○鶴舞中央図書館蔵本 ○東京大学南英文庫蔵本 ○静嘉堂文庫松井簡治氏旧蔵本
仮名本系統 ○太山寺本(影印・汲古書院) ○彰考館本 ○筑波大学蔵円成寺本 ○南英文庫本 ○東大本 ○徳久瀧文庫本(影印・日本古典文学会)
○十行古活字本(翻刻・注2前掲書) ○王堂本(翻刻・岩波書店)
新編日本古典文学全集『曾我物語』(小学館、平成一四年)、八九頁頭注七。
『源平盛衰記慶長古活字版 一〜六』(勉誠出版、昭和五二〜五三)による。
『内閣文庫蔵源平開縁録』(汲古書院、昭和四七)による。
7 新日本古典文学大系『舞の本』(岩波書店、平成六)所収本文による。
8 『著作性本文形成—書写性本文変化—の用語については、大井謙壽氏『平家物語』の成立基盤—その書承的側面—』(あなたが読む平家物語—平家物語の成立—(有精堂、平成五)所収)の定義に従う。
9 『頼朝伊豆流離説話の生成—平家物語・曾我物語より—』(『国語と国文学』昭和四一・六)、『平家物語と曾我物語—頼朝伊豆流離説話における伝承関係—』(『伝承文学研究』昭和四一・一一)。
10 『長門本『平家物語』と仮名十二巻本『曾我物語』—『曾我物語』卷十二三宮の姉、大機(尋ゆき)し事等の字句表現の一致・類似—』(『長門本平家物語の総合研究 第三巻 論究篇』(勉誠出版、平成一一)所収)。
11 (こいど もりとし 昭和学院短期大学 日本語日本文学科 助教授)